

「新臨床内科学」改訂第4版

阿部 正和 日野原重明 本間 日臣 編集
岡部 治弥 田崎 義昭 高久 史磨

愛知医科大学教授

高 橋 昭

「新臨床内科学」の初版が刊行されたのは今から10年前の1974年であった。その当時は、やっと大学紛争も終わり、講義や臨床実習が軌道に乗り始めた頃で、言わば、本書は大学紛争収拾後に発行された最初の内科学教科書であった。従来日本で発行されていた医学の教科書が比較的少人数の大成された高名な方によって執筆されたものであったのに対し、この本では、数人からなる編集責任者のもとに大家と新進気鋭の専門家が数多く参集し、それぞれの専門分野ごとに分担執筆するという画期的な教科書として登場した。この初版は、医学生に高い評価をもって迎えられ、当時の学生は内科実習の際にはほとんど本書を教科書として携帯していたし、また、その後に発行された医学教科書のあり方にも1つの新しい方向を示すものとして先鞭をつけたのである。

内科学には、基礎医学を基盤として臨床医学への道を拓く過程が要求

されている。このことは、内科学教科書は病態との関連を考慮せずに単に臨床症候や検査所見の羅列に終わることが許されず、個々の疾患の記述に当たっては病因病態から臨床像、臨床検査、治療、経過、予後に至るまでが有機的に系統立ったものでなければならないことを意味する。一方、これらを簡潔、明瞭に、しかも要領よくまとめ上げ、多人数分担執筆にありがちな不統一性や関係の欠如に陥らぬようにしなければならない。また、日進月歩と言われる近年の内科学の進歩の跡も的確に取り入れておらねばならない。

初版から10年たって、このたび第4版が上梓されたことをまずお喜び申し上げたい。版を重ねるということは、それだけ厳しい批判や競争に耐え抜いてきた内容を持ち、江湖の好評を博してきた証左であり、上記した内科学の教科書の条件を満たしているからにほかならない。

私は初版以来、学生諸君と共に内

科臨床実習に当たってこの教科書に親しんできた。診断が下されると、この本の該当疾患を読み、すべての特徴や条件を満たしているかどうかチェックし、参考文献にも目を通すよう指導した。10年の星霜を経て第4版では、ますます内容が洗練され、充実してきた。

第4版では更に下記の5点が特長である。

1) わが国の内科教科書では最初の企画であるターミナル・ケアが新たに加えられた。

2) 全人的医療へ向けて心身医学のケアが解説された。

3) 新しい疾患が多く採用された。

4) 最近の進歩を積極的に取り上げ修正された点が多い。

5) 索引が更に充実した。

本書では、病因や病態に重点を置いた分類がとられているため、これらが不明な疾患が一部脱落していること(例: Adie 症候群, 急性小脳失調症), また理解を助ける図や写真がもう少し多くあると更によいこと(例: 頭蓋底陥入症), など若干の個人的希望がないわけではないが、本書は広く医学生、研修生の標準的な教科書として、またパラメディカルの方々の参考書として、更に実地医家の座右の書として推薦したい。

B5判 1,050頁 図177 写真116
原色図40 1984 ¥8,800 ㊦400

医学書院 刊